

共和党による偏見の動員と ソーシャル・メディアの 申し子としてのトランプイズム

マルガリータ・エステベス - アベ

シラキュース大学マックスウェル政策学院准教授

2016年ショック： 欧州とアメリカの違い

2016年6月の英国のヨーロッパ連合離脱を問う国民投票でのBrexit派の勝利に続いて、排他的で保護主義的な発言を繰り返したトランプが11月の米国大統領選で当選したとのニュースにEU諸国では、戦後自由主義体制の崩壊に繋がるのではないかとの危機感が高まっている。今年はいくつかの大切な選挙があり、極右政党の勢力拡大が拡大しているヨーロッパ諸国では、大西洋を超えての排他的ナショナリズムを標榜するポピュリズムの連鎖反応の拡大が懸念されている。例えば、今年の春に大統領選挙のあるフランスでは、反EU・反イスラムを掲げる極右政党の国民戦線の党首マリーヌ・ルペンに十分に勝算があり、ルペンの勝利はフランスのEU離脱Fraxitを引き起こし、それはEUの終焉を意味するかもしれない。

こういった事態を目のあたりにして、政治学者や

政治評論家らを中心に、Brexitとトランプの勝利にみられる排他的なポピュリズムの台頭は、先進民主主義諸国における新たな政治的な潮流であるのかもしれない、と考える向きがでてきた。西ヨーロッパでも、かなり以前から極右政党の台頭が始まっており、極右政党の支持層が誰なのか、極右政党のイデオロギーとストラテジーについての研究はあったが、イギリスとアメリカで、排他的なポピュリズムが「主流化」したことにより、このナショナリスティックなポピュリズムの波は、先進国に共通な社会経済的な問題に起因しているのではないかという論争が起こっている。移民流入による文化的・経済的軋轢、脱産業化で取り残された低学歴男性労働者層の怒り、これをもっと進めた議論に、中道左派政党が労働者の党からリベラル派の党へと脱皮した為に、ブルーカラー層がポピュリズムに動員されたという説がある¹。

しかし、アメリカの場合、欧州の極右政党の台頭などとは異なり、共和党という既成政党が、公職経験のない素人のポピュリストを受け入れたところに大きな特徴がある。なぜ、トランプは共和党の予備選に勝てたのか？ トランプ政権には白人至上主義者が側近として入っていたり、大統領であることをトランプ一家のビジネスに利用としている様子も見え隠れしたり、ロシアとの繋がりを巡る疑惑もある。それでも共和党議会が黙っているのはなぜか？ アメリカでは、行政府と立法府はそれぞれ独立しており、相互に拒否権があるのみならず、議会には行政

Margarita Estévez-Abe

ハーバード大学政治学博士。ミネソタ州立大学、ハーバード大学を経て、シラキュース大学マックスウェル政策学院准教授。Welfare and Capitalism in Postwar Japan, (Cambridge University Press 2008) 大平正芳記念賞受賞、The Political Economy of Collective Skill Formation (Oxford University Press 2012) 共著、Beyond Familialism: Recalibrating Family, State and Market in Southern Europe and East Asia (Journal of European Social Policy 2016 年特集号監修)

府を見張る為の強力な権限が付与されている。そして、これもまた欧州諸国と大きく違う点であるが、アメリカの政党組織は全く集権化されていない。共和党大統領といえども、共和党の党組織や議員をコントロールしていないのである。つまり、議会内の多数派である両院の共和党が、トランプの片棒を担がなければ、トランプのホワイトハウスは機能出来ないのである。本稿の論旨は、共和党のから中道派の議員らが消えて行き、共和党議員とその支持者らが右寄りになっていた為に、リベラル派からは、過激なポピュリズムに見えるトランプであるが、保守系有権者の大多数が思っていることを隠さずに表面化させただけだったのではないか、というものである。

共和党の戦略に内在していた偏見の動員の顕在化としてのトランプイズム

排他的なナショナリズムはすでに2008年の大統領選の共和党副大統領候補のサラ・ペイリンのラリーでの白人だらけの聴衆が「USA, USA, USA」と叫ぶシーンにもみられた。彼女はパーソナリティー的にも話し方もトランプに非常に似ていた。特に保守系有権者にはエリート・アレルギーが強い。エリートは北東部の名門校出身者で、リベラル派で、大都市に住んでいない人たちを見下している、とみている。このために、ジョージ・W・ブッシュ大統領やサラ・ペイリンのようにあまり知的な話し方をしないことは、保守政治家にはプラスに作用する。アメリカ政治においては、反知性主義だけでなく、宗教や人種的偏見も大きな役割を果たす²。近年の共和党の職業政治家たちは、これらの要素を巧みに動員し、本来ならば民主党の再配分的な政策や環境規制強化から利する筈の有権者までもを、富裕層と大企業の為の経済政策を推進する共和党支持に惹き付けてきた³。

敬虔なクリスチャンらは、中絶の非合法化や同性婚の反対という争点のもとに結集する堅固な共和党の票田であり、世俗的な政府に非常に懐疑的である。特に、福音派クリスチャンらは、反科学主義で、進化論も地球温暖化も信じない人が多い。一方、

根強く残る人種的偏見も、共和党が推進する小さい政府を後押しする。2009年に盛り上がった小さい政府を志向する茶会運動の支持者らは、確固たる思想があつて小さい政府を志向しているのではなく、税収が、「働き者の自分たち」でなく、「怠け者の黒人・移民・公務員ら」に配分されるのが嫌なのである。「働き者の自分たち」が受給者になる社会保障年金や高齢者対象の医療社会保険であるメディケアには非常に肯定的だ⁴。年金と高齢者医療がアメリカの予算における社会保障費で一番大きい項目であるにも関わらず、多くのアメリカ人は自分の貰う年金と高齢者医療は再配分政策ではないと勘違いしている。つまり、人種的偏見と歪んだ事実認識が共和党に有利に作用しているのだ。公務員に対する反感は、民間よりも雇用契約が安定しており、労働条件やフリンジ・ベネフィットに恵まれていることが恨みの対象になっている⁵。

マイノリティーや公務員は怠け者であるといった偏見は、政治家の発言、保守的メディアのFox Newsやラジオ番組により維持・拡散されていった。つまり、保守的な有権者らに対しての、トランプ的な偏見の動員はずっと前から始まっていたわけである。Fox Newsが設立されたのは、民主党と共和党の党派的な対立が激化し始めた1990年代のビル・クリントン政権時代である。党派的に保守の側から報道するニュース・ケーブルとしてつくられたのがFox Newsだった。かなり偏った報道をするメディアで、2009年に初の黒人大統領が就任した後の反動は凄まじかった。人種的偏見とエリートへの嫌悪、さらに反イスラム感情までもが動員された。オバマはアメリカ生まれではない（つまり大統領になる資格がない）、イスラム教徒であるということが、保守系メディアで堂々と言及され、視聴者らを煽った。これはBirther運動と名付けられ、先頭に立ったのがトランプであった。2009年に全国化した草の根の茶会運動もFox Newsによる宣伝と動員に負うところは多かった⁶。茶会運動参加者には人種的偏見の強い人が多いことが指摘されている⁷。そして、こうした茶会運動に支援された議員たちが特に下院で増えていった。Fox Newsや保

守系ラジオパーソナリティによれば、リベラル派の男女平等推進は、フェミナチであり、リベラル派は政府を使ってマイノリティー・移民・女性を後押しし、白人男性は絶滅危惧種となっている、という筋書きだ。共和党議員らはBirther運動を放置し、トランプは2016年までオバマは本当のアメリカ人じゃないと言い続けていた。

以上のような経緯をみると、トランプ氏が突然登場したのではなく、共和党議員らが迎合していた保守系有権者の偏見にとっても親和的な人物だったことが良くわかる。ただし、共和党の政治家らは、宗教と偏見による有権者の動員をしながらも、公な場で差別的な発言をすることはなかった。ところが、職業政治家でないトランプはこの紳士協定を平然と無視し、Birther運動の先頭に立ったわけである。ここでトランプが学習したのは、差別的な発言をしても、自分に対してバッシングがないことだった。自分のテレビ番組「Apprentice」の視聴率も、ソーシャル・メディアでの人気も落ちることはなかった。共和党の予備選挙に名乗りをあげてからは、不適切な発言を繰り返すことで、自らのツイッターなどで話題を振りまき、大手メディア媒体を無料のキャンペーンCMさながらに使いこなした。中西部・南部あるいは農村や小さな町に暮らしている保守系のアメリカ人らにとって、知的でない荒っぽい口調のトランプが、ジャーナリストらに対して、お前らは「不正直 dishonest」なりベラル・エリートの代表だ、と罵声を浴びせる姿は小気味が良いものであった。キャンペーン・ラリーでは聴衆から大喝采を浴びた。市民権運動以降のアメリカでは、差別禁止法が制定され、差別的なことは云ってはいけないと暗黙の社会のルールも徹底するようになったが、これを「リベラル・エリート」や「フェミナチ」による「言論統制 political correctness」と苦々しく思うむきには、このルールを堂々と無視するトランプはまさに自分たちの代弁者であった。白人至上主義を標榜するウェブメディアのCEOのステイブ・バノンがトランプの側近となったのも、紳士協定上を尊重する共和党議員には考えられないことであったが、トランプはそれでも支持が落ちないことを誇示した。つ

まり、テレビ番組をもつ有名人であったトランプは、共和党と保守系メディアが行なっていた偏見の動員に便乗し、それをハッキリと顕在化させ、SNSを巧妙につかって、自分に注目を集めることに成功したのである。実際、トランプ支持者の多くがSNSとFOX NEWSからの情報に依存していた点はクリントン支持者とは大きく異なっていた。

2016年の共和党予備選では、あまりに候補者が多いために、まともなディベートにはならず、トランプには幸運だった。唯一、公職についたことがないことを梃に、他の候補者らを大企業からの政治献金のカネにまみれた政治エリートであると切り捨て、ワシントンの政治の仕組みをぶっ壊すと公約したトランプは、職業政治家らを破り、共和党大統領候補となった。この主張は茶会運動そのものだ。

大統領選の本選では、ヒラリー・クリントン候補に総得票数では300万票と票差を開けられたトランプであるが、低学歴白人有権者層の票の掘り起こしに成功し、民主党が有利だと思われていたミシガン州・ウィスコンシン州とペンシルベニア州を僅差で勝ったことで、Electoral Collegeの勝者となった。過去25年程は、低学歴白人層の4割前後は民主党大統領候補を支持してきたが、今回は僅か28%まで減少、7割弱がトランプを支持した。白人票が有権者の7割を占めるアメリカでは、低学歴の白人票の数も絶対数は大きい。通常は投票率が低いこの層を動員したことで、トランプはマイノリティー票に頼らずに勝てる道を共和党に示したのである。低学歴白人層のトランプ支持が非常に高かったとはいえ、白人女性の絶対多数からも支持を受け、白人男性にだけアピールしたのではないことは明らかだった。

トランプビズムを利用する共和党議会

政策的には、反貿易、公的投資の拡大とオバマケアよりより安い医療保険という公約は、共和党の従来の政策に真っ向から対立するものである。NATOへの批判、非常にロシアに近いスタンスも共和党の立場とは異なる。しかも、大統領に就任してから事実よりも都合の良い誇張と虚偽ばかり

を主張する姿勢は変わらず、毎日自分に都合のいい事を一方的にツイートしているという異常な状態が続いている。しかも、担当省庁に相談せずに、法律違反の大統領令を発令したり、トランプ一族が新しい権力を盾に商売しようとしているのではないか、大統領自身もロシア政府と関わりがあるのではないかとの疑惑も払拭されていない。ヒラリー・クリントンのありもしないメールサーバー機密漏洩事件、クリントン財団の寄付集めにクリントン国務長官が自分の立場を利用したのではないかと騒いでいた共和党議員も支持者らも、トランプに関しては何も言わない。

何よりも共和党議会にとって大切なのは、最高裁判所と連邦裁判所判事の空席に右寄りの判事たちを任命することである。任命権は大統領の専権であるが、上院の承認が必要とされる。オバマ大統領が、急死した最高裁判事の後任者を任命した際に、上院で過半数を占めていた共和党は、その承認の手続きを1年間拒みつづけた。上院共和党のサボタージュで、最高判事だけでなく、連邦裁判所判事にも多くの空席があり、トランプ政権では100以上の司法の空席の任命が行なわれることになる。共和党議会の最優先課題は、行政府と立法府を共和党で固めている間に、司法府を保守色に染めること、オバマ政権が通した医療改革法案(The Affordable Act通称オバマケア)を廃案にし、大型減税と環境規制などの規制緩和を実現することである。この目的の為には、トランプのホワイト・ハウス内で白人至上主義者が重用されようが、違法行為が行なわれていようが知らん振りを決めこんでいる。

アメリカ民主主義制度の試練

トランプイズムの誕生は、共通の事実認識が存在しないくらいまでの党派的対立の帰結である。議会内での所属政党を越えての政策協力は減り、議会も社会も党派的に分裂している。特に保守派の党派的に利用出来るものならばなんでも利用するという姿勢が、偏見の動員であり、Fox Newsであり、究極的には、fake newsであった。事実にとらわ

れないトランプ大統領は、本当に政権担当できるのか。テレビ番組のような演出はどこまで通じるのか。共和党議会とトランプの人三脚はまだ始まったばかりで、アメリカの国益へのダメージとアメリカの民主主義へのダメージを計るにはもう少し時間がかかりそうである。しかし、トランプの誕生した経緯をみると、アメリカの民主主義の直面する最大の危機はトランプのポピュリズムだけでなく、党派的にまったく分裂してしまったアメリカ社会にもある。■

《注》

- 1 <http://www.vox.com/2016/6/25/12029786/brexit-uk-eu-immigration-xenophobia>
https://www.washingtonpost.com/news/monkey-cage/wp/2016/10/24/europes-traditional-left-is-in-a-death-spiral-even-if-you-dont-like-the-left-this-is-a-problem/?utm_term=.0f8e611912d2
<http://blogs.lse.ac.uk/europpblog/category/authors/sheri-berman/>
Ronald Inglehart and Pippa Norris. 2016. "Trump, Brexit, and the rise of Populism: Economic have-nots and cultural backlash," online.
<https://research.hks.harvard.edu/publications/getFile.aspx?Id=1401>
- 2 Thomas Frank. 2004. *What's the Matter Kansas?: How the Conservatives Won the Heart of America* (Metropolitan Books, New York, NY).
- 3 Arlie Russell Hochschild. 2016. *Strangers in Their Own Land: Anger and Mourning on the American Right, A Journey to the Heart of Our Political Divide* (The New Press, New York, NY).
- 4 Vanessa Williams, Theda Skocpol and John Coggin. 2011. "The Tea Party and the Remaking of Republican Conservatism." *Perspectives on Politics*. 9 (1): 25-43.
- 5 Katherine Cramer. 2016. *The Politics of Resentment: rural consciousness in Wisconsin and the Rise of Scott Walker* (University of Chicago Press, Chicago, IL).
- 6 Vanessa Williams, et al., op.cit.
- 7 Ibid.